

令和5年7月1日発行 春燈/第78巻第7号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

春燈

2023 July

7
月号



成瀬櫻桃子の句

千年の暗さが涼し。ピエタ像

「素心以後」

ケルン大聖堂は西暦四年に建立されています。先生は平成四年五月にケルンでの「日独俳句交歓会」に団長として参加されました。この句、「大聖堂の暗さを「涼し」と感性で捉えられました。そして堂内で「ピエタ像」に出会えたのです。十字架から降ろしたキリストを膝に抱く聖母マリアの嘆きの景です。先生の敬虔な「救い」の心が感じられる一句です。

栗原完爾

成瀬櫻桃子の句

片言の子のもどかしや春隣

自註現代俳句シリーズI期14

『成瀬桜桃子集』昭和五十二年

ご長女美菜子さんは「永遠の子供」と言われるダウン症でした。絵をかくのが好きだったと聞きました。言葉はたどたどしいけれど感情は豊かです。私の息子も障害者（脳性麻痺）でした。先生の胸の内がよくわかり共感しました。私は今、福祉施設でそういう子供たちに関わるボランティアをしています。辛い事も含め全てを俳句に昇華された先生らしい作品だと思います。

西谷恵美子

名誉主宰 安立公彦

主宰 鈴木直充

春惜しむ流るる水の白さにも

靴箱に古靴ばかり亀鳴けり

腕組むは黙示の仕種花ぐもり

羽抜鶏おのれの影を掻き散らす

文人訃報の多き紙面や花曇

夕づつの光したたる犀星忌

仰ぎ見る天晴朗や散るさくら

大川の水のほひや燕来る

藤の花日影に垂れて夕日待つ

浅草の路地から路地のおぼろかな



当月集

鈴木直充選



○ 西村洋平

天と地の間にしだれ桜かな

壺焼や鳥の形の醤油さし

井戸水に一夜を明かす蜩かな

ぼうたんや深きくれなゐどよめかせ

廃校をまぬがれ五人入学す

○ 森田まさる

亀鳴くと話して修行の僧ふたり

わび状に花の一句を添へられて

小面の吐息をもらす花の闇

相席の人と話して花惜しむ

行く春の大原といふ停留所

○ 若松恭子

今生に為残ししこと花曇

囀や余りて厚きランドセル

をみな等は漬物上手林檎咲く

手元まだ明るき山路わらび摘む

村になほ一人の鍛冶屋柿若葉

○ 福田水明

燕来る緑十字の町工場

一本はぬきんでてゐる葱坊主

竣工の音楽ホール竹の秋

原発の切抜きに染み新樹光

書に倦みて縁にまはるや柿若葉

○ 杉山乃ぶ子

行く春や日英華語のアナウンス

春行けりなんぢやもんぢやに見惚れぬて

座右の書の生ききる知恵や春の星

からくりを見上げむと閉づ春日傘

舌頭に千転亀は鳴きどほし

春燈の句

鈴木直充選

春日傘海まで続く裏通り

神奈川 山下ゆき乃

教会の鐘の余韻や春夕べ

あんぐりと疾風頬張る鯉のぼり
東京へ火星儀を見に子供の日

サーカスの暗き入口修司の忌

発着の窓に飛花くる無人駅

青嵐過ぎて沈黙残りけり

花や満ち村に行事の触れ太鼓

亀二匹を語らふ春の岸

千葉 神宮司和子

持つて出たからとてささん春日傘

教会の屋根の三角花ぐもり

初蟬やだあれもぬない無人駅

囀の下に少年誰を待つ

四月馬鹿忘れて嘘を信じけり

埼玉 宮前 和子

歳時記のカバー掛け替へ春惜しむ

木の芽和まづ色と香を味はひて

春キヤベツ出荷の若き皓齒かな

神奈川 大塚 民枝

花びらの積もるきざはしさわがしや

肩車の子に手を振られ初桜

老いの身や暮れゆく春の影法師

青空へ風の意のまましやばん玉

寿福寺の空が鳶呼ぶ虚子忌かな

神奈川 井手 浩堂

一羽二羽流れに逆らふ残り鴨

磯菜摘む夫の釣り船沖に見て

沖へ出て竿を継ぎ足す若布刈

東京 大林 暁彦

遅れ来て隅に正座す花筵

メーデーの殿につく車椅子

内緒ごとにもろに洩れをり花筵

